

# AI時代に求められる監修が 必要な教材づくりのポイント

～専門性の高い教材制作に必要なこと～



# はじめに

## 「AI でやればいいのかじゃないか」

社内でそう言われた経験はないでしょうか。

教材や研修資料、社内冊子の制作を担当していると、上司や経営層からこうした声が届くことが増えています。

たしかにAIは便利です。指示を出せばあっという間にそれらしい文章を生成し、構成案まで提案してくれます。

しかし、現場の担当者はどこか不安を感じています。

**その不安は正しいと思います。**

コストも時間も大幅に削減できるように見えます。

AIは平均的に「それらしいもの」を作ることは得意ですが、「正確に伝わり、信頼できるもの」を作ることは別の話です。

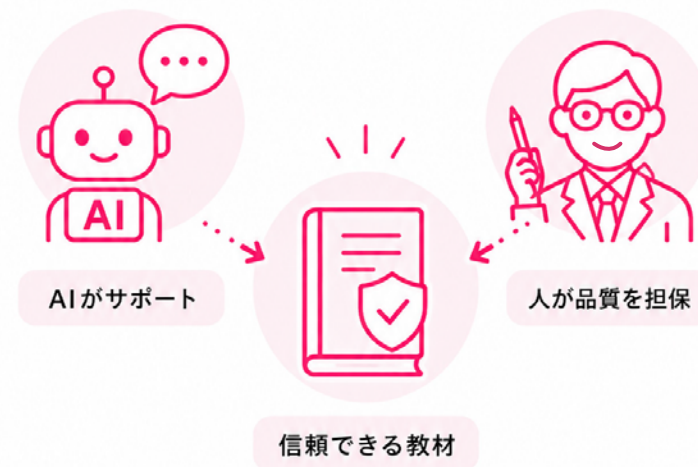
特に専門性が求められる教材や制作物では、AIだけで完成させることには見落とされがちなリスクがあります。

本資料では、編集制作のプロの視点から、AIで作った後に何が必要なのか、そして「誰が内容を保証するのか」という問いに向き合いながら、信頼される教材・制作物をつくるために必要なポイントを解説します。

「AIに任せていいのか、不安だ」と感じているすべての担当者の方に読んでいただくと幸いです。

# はじめに

## AI時代の教材づくり



ポイント：AIと人で品質を支える

# 目次・本資料の概要

## 本資料について

この資料では、教材・研修資料の制作を担当する人事・研修・広報の方に向けて、「AIで作った教材、このまま使っていいのか」という判断に役立つ視点と実務のヒントをまとめています。

編集制作の現場で積み重ねてきた知見をベースに、担当者が自信を持って判断できるための情報をお伝えします。

### 本資料の目的

教材制作に関わる担当者が、「担当者の手直しで済む場合」と「編集者・監修者が必要な場合」を自分で整理し、社内外に説明できる状態をつくる

### 対象となる方

教材・研修資料の制作担当者(初めての方・引き継いだ方・経験者)、人事・研修・広報・コンプライアンス部門の担当者・管理職

### 活用範囲

教材制作の方針整理から、社内調整・外部パートナーとの役割分担まで、制作プロセス全体にわたる判断の補助ツールとして

## 本ガイドの構成

01 | AIで7~8割はできる。では残りの2~3割は？

02 | AIが苦手な「クリティカルな間違い」とは何か

03 | 「誰が保証するのか」という問題

04 | 編集者の役割 一次情報を持つ人間が見ることの意味

05 | 監修者の役割は、お墨付きではなく、プラスの付加価値

06 | AIとDTP導入の経験から見る、専門家の役割

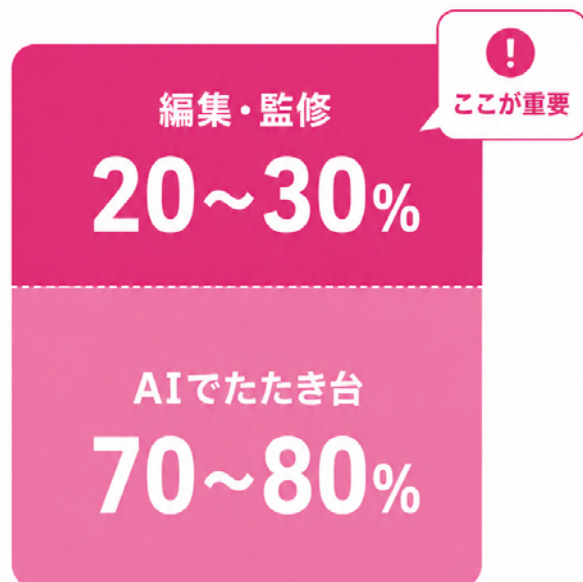
07 | あなたの制作物に編集・監修は必要か？

[判断ツール・判定の目安]

# 01 | AIで7~8割はできる、では残りの2~3割は？

## AIで7~8割はできる。

### では残りの2~3割は？



ポイント：人の判断で品質を担保

## AIを使った教材・制作物づくりが、急速に広がっています。

プロンプトを入れればあっという間に文章の骨格ができ上がり、構成案まで提案してくれる。社内資料や既存マニュアルを貼り付ければ、それをもとに原稿を生成することもできます。

実際、編集制作の現場でも変化が起きています。

当社でも、「ここ1年で、AIで作った一次原稿を持参するクライアントが増えてきた」と感じています。

各企業の中でAI活用を進める動きが活発になっていることの表れでもあります。

AIの活用は企業的に見れば、合理的な選択です。時間もコストも削減できる。

まずたたき台を作り、そこから仕上げていくアプローチは、教材制作においても有効です。「とにかく形にする」という最初の一步を踏み出しやすくなったことは、間違いなくメリットです。

ただし、一つ疑問が残ります。

## 「AIで作ったものを、そのまま使えていますか？」

現場では「7~8割は使えるけれど、残りの部分がどうしても使えない」という声も少なくありません。

AIは頭の整理や大枠を作るには役立ちますが、フィニッシュに至るところには無理があり、「そのまま使えない部分が残っている限りは、ある意味使えないとしか言えない」という見方もできます。

## 02 | AI が苦手な「クリティカルな間違い」とは何か

### 「AIは誤字脱字をまずしない」。

これは事実です。表記のブレや単純なタイプミスは、むしろ人間より少ないくらいです。

では、AIはミスをしないのでしょくか。そうではありません。AIが起こすミスは、別の種類のものです。AIは、ハルシネーションと呼ばれる「知ったようなことを書いてくる」間違いをする時があります。

それらしく、自信ありげに、整った文章を生成してくるからこそ、読み手も見落としてしまひやすい。これがAIのミスの本質です。具体的には次のような問題が起きます。

#### 問題

①

#### 細部の事実が誤っている

法令の条文番号、数値、固有名詞などが微妙にずれている。全体の論旨は正しそふに見えるため、見落とされやすい。

#### 問題

③

#### 文脈が飛んでいる

「機械Aの説明をしている部分で、突然『機械Bを一時停止する』とだけ書かれている」ようなことが起きる。前提知識の説明が抜け落ちるのは、AIが特に苦手な領域です。

#### 問題

②

#### 現場の実態と合っていない

一般論としては正しいが、自社の業務フローや現場ルールとは異なる内容になっている。

#### 問題

④

#### 責任の所在がない

AIが生成した文章には、誰も「これで正しい」と保証していません。内容が正確かどうかを、誰かに確認する必要があります。

これらに共通するのは、「表面上は正しそふに見える」という点です。

単純な誤字脱字であれば担当者も気づきやすい。しかしAIのクリティカルな間違いは、内容をよく知らなければ見抜けません。「知ったようなことを書いてくる」からこそ、読む側もついつい信じてしまうのです。

出版・編集の現場では「1万文字中1文字の誤りも許容できない」水準が求められますが、現状AIはその基準を安定してクリアできるレベルには達していません。

## 03 | 「誰が保証するのか」という問題

### AIで作った原稿を担当者が手直しする。 多くの企業でいま起きていることです。

では、その手直しされた原稿は、「正確で、現場に合っていて、伝わる」ものになっているでしょうか。

担当者は内容をよく知っています。しかし、「内容をよく知っている」と、「良い教材を作れる」ことは別の話です。

- 「これは当たり前だから説明しなくていい」と省略してしまう
- 専門用語をそのまま使い、読み手には理解できない
- 情報の順番が、学習者にとって自然でない

「自分はわかっているから、相手もわかるはず」という思い込みが、教材の伝わりやすさを下げてしまうのです。そしてより根本的な問いがあります。

### 「その内容は、本当に正しいのか。誰が保証するのか。」

担当者が「大丈夫そう」と判断しても、それは専門家としての保証ではありません。コンプライアンスを重視する企業ほど、重要な制作物には必ず第三者の目が必要です。賢い会社ほど、最後は必ず人を使う。これは、AI活用が進む現場での変わらない現実です。

#### 誰が保証するのか？



#### 担当者だけでは不安

- 正確？
- 現場に合う？
- 伝わる？

#### 編集・監修で担保

- 第三者確認
- 専門性チェック
- 自信を持って配布

信頼できる教材へ  
正確性・妥当性・伝わりやすさを確認

ポイント：品質の責任は最後に人

## 04 | 編集者の役割 一次情報を持つ人間が見ることの意味

### 編集者の役割

一次情報を持つ人間が見ることの意味



### 「編集者って、誤字脱字を直す人でしょう？」

そう思われることがありますが、編集の仕事はそれだけではありません。

編集者がまず行うのは、「誰が読むか」を起点にした構成の再設計です。AIは文章を生成できますが、「この読者は何を知っていて、何を知らないか」「どの順番で届けると理解しやすいか」という判断は苦手な領域です。

### まず、「誰が読むか」を考えた構成に組み直します。

良い教材や資料には次の要素が必要です。

- スタート地点の明確化(前提知識・対象者の設定)
- 「当たり前」のことも省略しない網羅性
- 前提知識から基本、応用へという自然な学習の流れ
- 図解・具体例を使った「伝わる」表現

どんなに正確な情報でも、構成と表現が悪ければ伝わりません。AIが生成した原稿は「誰のために、何のために」という軸が曖昧になりやすく、「それらしいが伝わらない」教材になりがちです。

また、編集者は「一次情報」を持っています。AIが生成する文章が二次情報の組み合わせであるのに対し、編集者が積み上げてきた「何が伝わって何が伝わらないか」という感覚は、制作現場から培われた一次情報です。AI時代だからこそ、この価値は高まっています。

## 05 | 監修者の役割は、お墨付きではなく、プラスの付加価値

「監修者」というと、専門家に名前を貸してもらっただけのイメージを持つ方もいるかもしれませんが。しかし監修には、もっと本質的な意味があります。

### ① 自分たちの判断だけを信用しない

法令の解釈、専門用語の正確な使い方、業界特有の慣行。これらが正しく反映されているかどうかは、その領域の専門家にしか判断できません。「自分が読んで大丈夫だったから大丈夫」は、担当者の知識の範囲内で行われていない判断です。

### ② プラスアルファの価値を加える

監修者が原稿を見るのは、誤りを指摘するだけではありません。「ここに一言加えると理解が深まる」「この根拠を示すと納得感が出る」という視点で、教材をより価値あるものに仕上げます。

AIが生成するコンテンツが増えるほど、「誰が内容に責任を持っているか」という信頼の担保はより重要になります。監修者が「自分の名前をかけて正確性を担保する」。これはAIには代替できない、人間固有の価値です。

## 監修者の役割

お墨付きではなく、プラスの付加価値



## 06 | AI と DTP 導入の経験から見る、専門家の役割

### 専門家の役割

AIとDTP導入の経験から



DTP導入

制作を効率化



AI導入

下書きを効率化



専門家



品質判断



構成設計



最終確認



道具



専門家



信頼できる教材



ポイント：道具が進化しても、人の役割は残る

### 「AIが仕事を奪う」と言う声があります。

しかし、よく似た状況を、編集・出版業界はすでに一度経験しています。今から、20～30年前、DTP(デスクトップパブリッシング)が登場したときのことです。

それまで、デザイン・組版・編集はそれぞれ専門の職人が担っていました。ところがDTPの登場で、一人のパソコンでそれらすべてができるようになり、「編集者も組版ができる」「デザイナーが編集領域まで入ってくる」という、役割の境界が曖昧になった時期がありました。当時、現場では「編集者はいらなくなるのではないか」という声も上がりました。しかし、結果はどうだったか。

### 最終的には、専門性の高い仕事は専門家に任せ方がよいという結論になりました。

DTPというツールが普及しても、編集者の仕事がなくなったわけではない。ツールを使いこなしながらも、品質の担保は人間の専門家が行うという形に落ち着いたのです。ツールの登場は、専門家の役割をなくすのではなく、専門家が担う領域をより明確にしたとも言えます。

AIの登場も、本質的には同じ構造です。AIはツールとして非常に強力で、作業の効率を大きく上げてくれます。しかし、「誰が保証するか」「読み手に伝わるか」「専門的に正しいか」という問いへの答えは、ツールが出してくれるものではありません。編集・制作の現場では、すでにその答えを持っています。

## 07 | あなたの制作物に編集・監修は必要か？ [判断ツール]

ここまで読んでいただいた上で、「では自分たちの場合はどうすればいいのか」を考えてみましょう。  
すべての制作物に編集者と監修者が必要なわけではありません。制作物の性質によって、必要なレベルは変わります。

以下のチェックリストで、教材や制作物に何が必要かを確認してください。

### STEP 1 | まず確認する：担当者手直しで十分か

以下のチェック項目に1つでも当てはまれば、編集または監修が必要です。

- 社外の人にも読む可能性がある
- 法令・規程・制度に関わる内容が含まれる
- 専門用語や業界特有の表現が多い
- 誤りがあった場合、業務や安全に影響する
- 監修者や第三者のお墨付きが信頼性に影響する

### STEP 3 | 監修が必要かを確認する

以下のチェック項目に1つでも当てはまれば、監修者のアサインを強く推奨します。

- 医療・法務・金融・安全など、専門知識の正確性が重要な内容を含む
- 読者がこの内容をもとに実際の業務判断を行う
- 誤った内容が読者の行動に直結するリスクがある
- 「誰が内容を保証しているか」が読者・社外への信頼につながる

判定の目安は、次のページへ⇒

### STEP 2 | 編集が必要かを確認する

以下のチェック項目に2つ以上当てはまれば、編集者の関与を推奨します。

- 読者の前提知識レベルが明確に設定されていない
- 構成が「作り手の都合」ではなく「学習者の理解」に沿っているか不安
- 図解・具体例・設問の設計まで手が回っていない
- 社内の人間だけで作ったため「当たり前の省略」が起きているかもしれない

## 07 | あなたの制作物に編集・監修は必要か？ [判定の目安]

### <判定の目安>

#### STEP 1を確認してください。

すべて「いいえ」であれば、担当者の手直しで対応できる可能性が高いです。1つでも「はい」があった場合は、STEP 2に進んでください。

#### 次にSTEP 2を確認してください。

「はい」が2つ以上あれば、編集者の関与を検討することをお勧めします。

#### 最後にSTEP 3を確認してください。

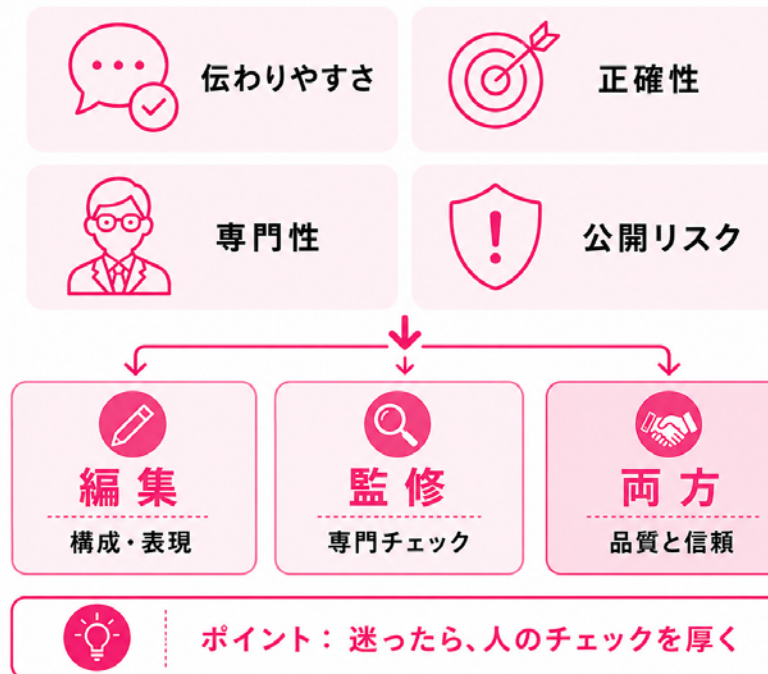
STEP 1またはSTEP 2で「はい」があった場合は必ず確認してください。1つでも「はい」があれば、編集者に加えて監修者のアサインも必要です。

ここまで読んでいただいた上で、「では自分たちの場合はどうすればいいのか」を考えてみましょう。

すべての制作物に編集者と監修者が必要なわけではありません。制作物の性質によって、必要なレベルは変わります。

## 編集・監修は必要？

### 判定の目安



### ✉ まずはお気軽にご相談ください

アーク・コミュニケーションズでは、教材・研修資料・企業向け冊子の編集・制作を、専門スタッフを配置してお引き受けしています。

「AIで作ったたたき台はあるが、このまま使っていいか不安」「専門性の高い教材を作りたいが、社内リソースが足りない」

「監修者のアサインも含めてまるごと相談したい」。

そのようなお悩みの際は、まずはお気軽にご相談ください。

# About US ~ Corporate Profile ~

## 編集プロダクション アーク・コミュニケーションズ



### 制作過程の分かる事例紹介

<https://www.ark-gr.co.jp/story>

### 実績一覧

<https://www.ark-gr.co.jp/works/>



### 業務内容

雑誌・単行本・ムックの企画・制作、PR誌、社内報、会社案内、業務案内などの企画・制作、オリジナル電子書籍の企画・制作、ホームページなど電子媒体コンテンツの企画・制作

### 窓口

担当：富樫 Tel：3-5261-2628 E-mail：togashi@ark-gr.co.jp

## アートディレクション・グラフィックデザイン アーク・ビジュアル・ワークス (AVW)



- 企業・団体の報告書
- ホワイトペーパー
- 機関誌等の定期刊行物
- 教育ツール



### 窓口

担当：赤荻 Tel：03-5261-2792

E-mail：akaogi@ark-gr.co.jp